

2021年度GTセミナー 第55回保育環境セミナー 人的環境編 前編①

第240号 2021年10月4日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

人的環境編 前編①

2021年9月25日に「第55回保育環境セミナー」
(人的環境編 前編)を新宿せいが子ども園にて開催しました。

全国から100施設を超えるお申し込みを頂きました。
前回までは「空間的環境」「物的環境」についてお送りしてしまし
たが、今回は第3編目「人的環境」についての前編①です。

「人的環境」について藤森代表から考え方をお示し頂きました。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)



第55回保育環境セミナー 基調講演（人的環境編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんおはようございます。今年は環境について3回シリーズで行っています。保育はもともと平成元年に「環境を通して行うものである」と決められてきました。先生が子どもたちを指導する形が、平成元年から援助する形に変わりました。子どもが主体的に活動することを手助けする。そのために環境を構成しないといけない。その環境の話をしてきました。なかなか難しいのは、TVで若者たちに、こういう言葉を知っているかというインタビューがありました。言葉は人によって、理解が異なる場合があります。例えば、教育新聞に出ていましたけど、大学の先生が「子どもたちを見守ることは大事だけれど、関わったり、援助することも大事である」と書かれていました。「見守るには2面性あり、見守るだけではなく、ある時は関わったりすることが大事であると書かれていました。私が違和感があると思ったのが、2面性を表しているのが「見守る」だと思っている。見ると守る、二面性があるので、見ているだけでなく、援助することが「見守る」なのだが、どうも見ているだけのイメージ強い。私の保育を「見守る保育」という言い方をしますが、実はそれは一端であって、私が提案したい保育はそれだけではなく、「見守る」という言葉は指針の中に、例えば1歳児の中に、「子どもは温かく見守るとともに、応答的に関わる」と使われていますので、私のオリジナルではないです。

環境を通してということ順に説明をしてきて、空間をどう作るか。これも言葉だけではなく、時代的もあります。今回は人の環境だけれど、現在コロナの感性が広がっているときに、保健所がコロナが出てきているときに、その環境について注意することがあります。例えば、自治体によっては広い空間よりも、部屋を区切った方がいいという指導もするところもあるそうです。しかし、私からするとTVで感染を防ぐために小学校が教室で授業をするときに、密になるので二部制にして、半分ずつ授業していると聞きます。私からするとだったら、教室が2倍の広さならいいじゃないと思う。なんで、狭い方がいいという指導をするのかよくわからない。同じ空間でも、保育園は平屋にしなさいという自治体が多いです。2階建てだと、子ども保育士も行き来が大変なので平屋にしなさい。東京は狭いので2階建てが昔多かった。そうすると公立保育園は、2階建て保母と言って加算があった。行ったり来たり大変なのでその分の加算があった。先日聞いたところによると、仙台で保育園を建てるときに、役所から3階以上にしなさいと言われたらしい。津波が起きるといけないので、避難できる場所を作りなさいと。平屋だと浸かってしまう可能性がある。ということ時代で言います。今回のコロナでも、どんなことを空間で言ってくるかわかりません。突き詰めたら、保育所の最低基準の広さを変えるべきだと思いますね。広さが一人当たり1.98㎡でソーシャルディスタンスを取れと言っても無理。それなら一人当たり3～5㎡にしないと無理。それからある園から質問があって、給食の時にセミバイキングをコロナの間はやめるとの話があったそうです。それに対して、「セミバイキングはやめます。これからは学校方式にします」と言ったらいいんじゃないと言いました。小学校は前に並んで、係りがよそって、子どもがトレーをもっていくわけですよ。それを学校ではやっているのに、園ではやってはいけないというのは、おかしいですよ。セミバイキングは違うイメージがあるんでしょうね。私たちは量を言っていくことはあっても同じですよ。時代によって変わってくることもあります。言葉は遣うのが難しいので、去年から藤森メソッドという言い方をするのは、受ける側がいろいろな受け取り方をするので、私が考えている保育とするのがいいだろうと思っています。3回シリーズの物・空間は全体的にそういうことで、藤森メソッドであまり特別なことではないですね。

私が言い出したこととして「ゾーン」というのも一般化してきました。

—人的環境とは—

藤森メソッドのまだまだ広がっていない一番の特徴は、人という環境です。オリジナルのものがいくつかあります。今回は人の環境について話をします。先日の日曜日に妻と散歩しているとき、大学生くらいの女性が犬を連れて散歩をしていました。途中、犬が歩くのを渋ったので引っ張っていたら、仕方なく犬が歩き始めたが、また止まった。散歩をしていた女性がどう思ったかわかりませんが、引っ張らないで待っていた。そうしたら犬が座り込んだ。何をしてもない、ただ座ってじっとしていた。その女性はじっと待っていた。少ししたら犬が立ち上がって、歩き始めた。ちゃんと待っていた。犬があちこち嗅いだりしているときに待つならわかるが、その女性が待っていたら立ち上がっていた。犬と人間を比較するのは変だが、保育士を見た時に、子どもたちもそういうことがあると思う。ちょっと座り込んで、ふっとしたいこともあると思う。本人が納得するまで待つと、ふっと立ち上がるとか、片づけることがあると思う。それを待てないからと言って、強引に引っ張っても身が入らない。その女性はいいい保育士かなとみていましたけど、人という環境は細かいことがあります。3回の最後なので復習からいきたいと思います。

—発達の特徴—

発達は、子どもが自らの経験を基にして、周囲の環境に働きかけ、環境との相互作用を通じ、豊かな心情、意欲、態度を身につけ、新たな能力を獲得する過程です。

先日、来年4月に私の法人で、せいがの森こども園に就職をしたいという学生さんが面接に来ました。彼女は、せいがの森の卒園児でした。アルバムを見たら、大きくなったら、せいがの森保育園の職員になりたいと書いてありました。園で保育をされる経験があり、好きなことをやれた経験を通して、自分は保育士になりたいという心情が生まれ、せいがの森保育園に勤めたいと意欲が生まれ、園に電話が来て就職したいという態度が生まれ、「就職したら、新しい保育などを吹き込んでください」と話をしました。新しい能力を獲得するということです。人というのは経験に大きく影響します。これが発達です。その環境を通しての環境は様々あります。

—子どもにとっての環境とは—

子どもを取り巻く、まわりの状況。

広義：家庭・社会・自然などの外的な事の総体。

狭義：子どもと何らかの関係を持ち、影響を与えるものとして見た外の世界。

シンガポールで「見守る保育」を実践している園がいくつかあるんですけど、環境を通してというのが新鮮に見えたようです。先生が何かするというのが強かったんですけど、「見守る」は手を出すかどうかではなく、環境を通して行うことということを保護者に説明するものです。玄関に掲示がしてありました。皆さんもぜひ保護者にどんな保育かを示すのにいいと思います。最初英語に訳した時は、watch&waitと書かれていました。まず、子どもが真ん中にいて、人と物と空間があり、それぞれの説明がしてありました。保育者が用意していることを説明していましたが、とても有効だと思います。園の活動を保護者に見せることもいいですけど、環境を3つで表したときに、人は保育者ということが多かったですが、他の子どもたちとっています。すべての写真が子ども同士になっています。それまでの保育は、先生が子どもたちに何かをすることが中心でしたが、異年齢で下の子の面倒を見ていることも画期的で、シンガポールは異年齢保育が禁止されているが、異年齢の良さを訴えている。コアタイムは、異年齢は出来

ないのですが、生活の面では上の子が下の子の面倒を見ていることが大事。家庭の中で少子化で、兄弟が少なくなってきたので、園でそういう体験をしているんだと出しています。今回コロナで、自粛で家にいる家に居はじめると、特に乳児は家で見ようとする人が多いです。これは学校でも出ていましたけど、学校もリモートになった。学力調査をしました。家でリモートでやったり、学校で来ない子たちの学力を調べたところ、学力には大して差がなかったと2、3日前の新聞に出ていました。リモートで先生たちが頑張ったのかもしれませんが、逆に言えば、学校はなくてもいいじゃんと思ってしまうんですね。それ以上にアンケートの中で心配なのが、学校は楽しいか？という質問に対して、早く学校に行きたい、友達に会いたい子が多いが、今回の6年生の調査で、学校が楽しいと答えた子が、5割を切った。家の方がいいというのは、とても危ないことだと思います。同じようなことが保育園でも起きているんです。園に行くより、家の方がいいと。コロナが心配だからということがあって、保育園って何の役目なんだろう？仕事をするから預けていたのだろうか？リモートで、家で仕事が出来て、子どもを見れるようになったから、預けなくていいのだろうか？と思っているのだろうか。そんな保育をしていたのか、なくてもいいものなのかということがある中で、人という環境は家ではできない環境です。物は買えば家でもできますが、親が子どもに教えれば先生に代わることはできますが、子ども同士は家では出来ません。自粛で家にいたらできません。人という環境は、とても大事です。家で保育できない、面倒を見れない子たちを救済措置として保育園は作られました。お母さんや、家庭でできるようになったら保育園はいらないという風になってきています。急に待機児が減ってきて、お母さんの代わりならお母さんが出来るなら、お母さんがいいとなってしまいますよ。園は、人というか多くの子ども、保育者の関わりは園でなければだめなんだ、という保育に変えないといけない。それが一つの人という環境です。ぜひ、私たちのグループはそうしていると思いますが、家庭の代わりではないことが分かってきています。

—人という環境—

- ・保育者
- ・他の子ども
- ・保護者
- ・地域

最も影響するのが、保護者と言われていますが、最近は必ずしもそうではないと言われています。ニュースで熱湯を浴びさせられた子がかわいそうで、聞くだけでたまらないが、どうしても保護者信仰が強い。保護者に帰してしまう。本当は分離させないとダメ。もちろん保護者は大事だけれども、それはいい保護者の場合で、私たちは専門性も持っているので、保護者ではできないことを説明するべき。まず、指針の中には乳児保育と3歳未満の保育が大事だと特別に書かれています。

—乳児保育に関わるねらい及び内容（基本的事項）—

社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちを通じ合う」

前（旧指針）の0歳の保育の中には、担当制とはっきり書かれています。それが次第にニュアンスが変わり、特定な人という言い方をして、特定な人とは一人の人とは限らない。愛着研究の遠藤先生が、モノトロピーが否定されてきて、一人の人から複数の人に行くのではなくて、同時に複数が子どもたちに影響するという関係する。だんだん、担当から特定な人になり、身近な人になってきています。脳の感受性の中でも書かれています。乳児は身近な人の顔を見ることで、人の気持ちを感じるようになり、共感できるようになると書かれています。

—社会的ネットワーク—

Bowlby 理論の中核的仮定「モノトロピー」と「階層的組織化」(1つの関係から他へ)

しかし近年、こうした仮定に批判的な見方も… 社会的ネットワーク理論・集団的社会化理論

Hardy's の進化理論的議論→ヒト本来の子育て集団体制、子どもは元来 alloparenting に順応し得る「統合的組織化」「独立並行的組織化」への注目

—1歳以上3歳未満児の保育関わるねらい及び内容—

温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。

イ人間関係

立ち直る経験や感情をコントロールすることへの気づき等につなげていけるように援助すること。

子どもはこういう時は、この人と使いこなして、家庭と違うことが分かってきました。家庭でのくっつき行動は、保育園ではさほど見られないことが研究で分かってきています。家庭の代わりではなく、家庭と違う。

指針の1歳以上3歳未満児の1歳以上は、気をつけないといけないのは、1歳クラスと思うのは大間違いです。ほとんど0歳児クラスです。1歳に育休が終わって、園に入って0歳児クラスの子はみんな1歳以上ですから、これは0歳児クラスの子のことです。0歳児クラスから立ち直る経験や、感情をコントロールする力の基礎をつけていける。これは感受性のグラフからこんな風になってきました。物を取られる、けがをしているかどうか見ることは大事ですが、本人が立ち直る経験の援助をしてあげること、物を取り返すことではありません。ここにいるから安心なさい、といることです。保育士の環境として大事にされていることです。

—「見守る」意味(応答的・アタッチメント)—

この頃の刈り込みは、赤ちゃんが自ら必要なものを選択していきます。大人が先回って手を貸してしまうと、間違った選択をしかねません。この時期こそ、周りの大人は、子どもに対して応答的な、また、安心基地としての存在として、子どもを見守っていくことが必要なのです。先回ってやらない、「見守る」のは、守ることは必要ですが、まず見ること。子どもが求めているのか、求めたら積極的にやってあげる。それは上手にシナプスを減らす手伝いをすることです。先回ってやってしまうと、極端に減らしてしまうことがありますので、応答的に関わるのが、見守っているということです。シンガポールでは watch&wait といって、まず子どもをよく見て、ちょっと待ちましようということです。プラスアンドサポートが入っていますので、援助しましょうというのが「見守る」の根拠です。本来のアタッチメントの意味です。愛着は、愛して、くっつくイメージがあるが、保護者はくっつき行動が出るので良いですが、乳幼児施設が愛着と訳すと誤解を招くので、アタッチメントそのまま使っています。先回ってやらない。そうすると子どもは失敗することが多いです。立ち直る経験を子どもたちは学び、先生はそれをやってあげたり、先回って手を出すのではなくて、いつでも困ったらここにいるよ、といわゆる安心基地として、一緒に遊ぶ、面倒を見るだけではなく、何か失敗する怖い思いをする。その時に、いつでも守る人がいるよ、のサインがアタッチメントです。どうも誤解を招いていて、何かしてあげているのは依存になってしまい、子どもは先生の目を気にして、行動するだけになってしまいます。応答的にするために、アタッチメントという安心基地が必要です。いつでも守る用意をしておかないといけません。アタッチメントも、人の環境の中で気をつけないといけない言葉だと思います。

—時代の要請—

CARL BENEDIKT FREY AND MICHAEL A. OSBORNE THE FUTURE OF EMPLOYMENT:HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION? (論文概要) (仕事への就職活動はコンピューターにどのように影響されるか?)

10~20年程度のうちに自動化される可能性が高い(70%以上)仕事は、全体の47%。

もう一つ時代で変わってきているのが、AIの時代になると、子どもにとって必要な力が変わってきますので、当然、関わり方も変えていかないとはいけません。

—ユヴァル・ノア・ハラリの最善のアドバイス—

強靱な精神力やEQ(心の知能指数)の涵養にフォーカスせよ!

一時期、認知的な物を与えてきたがAIが出来るような時代になると、知っていることに価値があるのではなく、これからは強靱な精神力EQ力という言い方をしました。ガートナーという人が提案をしました。

—EQ(心の知能指数)—

- ・自分自身を動機付け、挫折してもしぶとく頑張れる能力
- ・衝動をコントロールし、快楽を我慢できる能力です。自分の気持ちをうまく整え、感情の乱れに思考力を阻害されない能力
- ・他人に共感でき、希望を維持できる能力などの非認知能力

このEQ力とは別に見直されているのは、ペリー幼稚園のアメリカの実験です。アメリカの貧民街の地域の低所得者層の子どもたちは、学校へ行って学力差が出るので、早く幼稚園へ行かせ、いろいろなことを教えました。当然早く教えているので、小学校で成績が良く、意味があると、国が莫大なお金を投資して、就学前から早く教えるようにしました。その子たち4年生くらいになったら、教えていない子たちと大して変わらなくなってきた。結果的に早く教えても、教えなくても、早く教えることは短期的には効果があっても、長期的には効果がない。乳幼児期にお金をかけて教えても、意味がないのではないかと、この計画は失敗しました。ところが長期的に高校、大学、就職、社会に出て、就学前で早くやった子たちが差が出てきて、素晴らしくなった。それをヘッグマンが調べたところ、学力的なものとは違うものが幼児期に身についた。これが結果的に長い目で見た時に、学力にも影響するし社会に出てでも、影響する。認知的な物以外のものが身につくと言って、それを非認知能力といった。ですから乳幼児期に投資をすることは経済的に国が発展すると発表をして、ノーベル賞を取り、非認知能力が脚光を浴びました。AIの時代に認知的能力ではなく、非認知能力が大事になってくるとヘッグマンが出しました。この非認知能力が乳幼児期につくということで、同時に感受性のグラフです。いつ頃、どう付くかのものです。見る力、聞く力などはほとんど3歳未満です。3歳未満でピークを迎え、その時の環境が大事です。この環境によって、感受性が高くなることです。ここの説明は先ほど言ったように、ビジョン(見る力、感情抑制能力)にも繋がるが、2歳までに多くの人の顔を見ることで、人の感情を理解し、共感すると言われていました。2歳まで母子だけで家で育つと、ここが育たないと思っています。例えば、ランゲージがありますね。これのピークが1歳前。将来、語彙が豊富になるには、この時期に潤沢な言語環境に置かれることと書かれています。友達と話す、大人と話すことで将来語彙が豊富になり、説明する力が付くと言われていました。これも家庭だけでは難しいです。乳幼児教育を転換しないとはいけないと思うのは、家庭の方がいいのは、認知的な物を伸ばすのには、家庭の方が効果的なことがあります。お母さんが教えればいいし、ネットで見

ればいいが、非認知能力は家庭では育てることは難しいです。兄弟が少ない中では、子どもが多い社会に入れな
いといけないと思っています。育休を取って親子で過ごさせましょう、3歳まで母親と過ごさせましょうでしたが、人口
が減ってきているので、早く子ども集団の中に入れましょうと、政策転換をするべきだと思います。乳児の頃から、
入る権利を与えるべきだと思います。ただし、そのためには保育所、こども園などが子どもとの関わりを変えな
いといけないと思っています。制度的に変えることと、カリキュラムを変えることが大事だと思います。

Dr.Clyde Hertzma

出所：<https://www.youtube.com/watch?v=M89VFlk4D-s>

なぜ乳幼児期の発達は大切なのか？包括的な回答として、「その後の人生のチャンスや健康に決定的な影響を与える
から」と言えます。主要な理由として、乳幼児期における脳と生物学的な発達は、重要な一里塚であり、非常に感度
が高い時期だからです。就学までに起こる脳の発達内容のラインから見ると、就学時には、その後の人生の成功の基
となる非常に多くの基礎能力が培われていることとなります。

—保育者と子どもの関わりにおける共通点—

イギリスの研究の中で、優れている保育者と子どもの関わり方の研究をした結果、保育者の関わりが温かく、応答的
であると書かれています。指針の改定の時に私はヒアリングで呼ばれたときに、この文言を入れてほしいということ
を言いました。それで入ったかわかりませんが、入りました。小さい子は面倒を見ればいい、世話をすればいいとい
うものだったが、そうではないです。それから関わりだけではないです。優れているプレスクールの中では、子ども
主導の遊び、教師が繋ぎ、発展させる活動が多い園は、非常に質が高かった。先生が繋ぎ、発展させていく活動
が多い場合、子どもがやることを繋ぎ発展させていくことです。

—保育の質研究 NICHD（国立小児保健・人間発達研究所）—

今度はアメリカの研究です。「ポジティブな態度を示す」ということを挙げています。保育者はいつも元気で明る
く子どもに接しているか？保育者はいつも子どもの手助けを親切にしているか？保育者はいつも子どもにしばしば微笑
みかけているか？これが保育者としての質が高いと言っています。質の高さには、指針を勉強しているかなどは書
かれていません。子どもにとっては、元気に明るくしているか、手助けをしているかです。子どもの発達を促してい
ます。大学の講演を聴くことが発達を促すことではありません。保護者にしても大事なことです。ある保護者と一緒
になり、途中まで一緒に帰ったのですが、そのお母さんが「私も保育士になろうかしら」と言ったので、「何で
ですか？」と聞いたら、「せいがの職員が楽しそうだから」と言っていました。私はすごく有り難かったのは、コ
ロナの時期は暗くなるし、ピリピリします。保育者を見て、毎日楽しそうにしている、こんな時期になりたいと思
ってくれるのはありがたいことだなと思っています。

（次号に続く）

本稿は、2021年9月25日に開催した「第55回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）